

高見 健人

5月20日、中学校生活最後の体育大会があった。僕は応援団団長をつとめた。僕が1年生の時に兄が応援団長をしていたので、自分もやってみたいという気持ちはあった。

実際に応援団長をしていて一番きつかったのは、みんなに注意をすることだった。声が小さい、列がそろっていない、手足の振りが小さいなどと一つ一つ注意することは辛かった。注意を受けて喜ぶ人はいないからだ。僕もその気持ちがわかる。

きちんとできていないと、僕が先生から指導を受けた。でも自分が指導を受けている方が、まだ気が楽だった。しかしこのままでは応援団長としてだめだと何度も思った。団員が先生から注意を受けるよりも、自分が注意したほうがいいと思って、声をしぼり出していた。

体育大会が近づくにつれて、課題が解決していくのではなく、やらなければならないことが増えていく気がした。何から手を付けていけばいいのかわからなくなり、前日には体調を崩し、グラウンドにでることができなかった。その時、僕の代わりに、団員が声をかからして頑張ってくれていた。有難かった。

応援団演舞をしているときは楽しかった。春休みから3年生を中心に練習してきた。先輩に教えて、一つずつできるようになると、本当に嬉しかった。

グラウンドで場所を確認したり、他の団員と動きを合わせる段階になると難しさも感じた。

大会当日は迫力のある応援団演舞を地域、保護者の方々に披露することができた。大きな満足感だけが残った。残りの中学校生活まだまだやることがある。今回の経験をいかして頑張っていきたい。